

未来に向けて —考えてきたことを振り返る—

中谷勝哉*

For the future —Looking back on my thinking—

Katsuya NAKATANI

Abstract

This essay is a retrospective on my thinking on psychology and its related domains tracing my research history of decades past to more recent experiences. It covers; starting with the experiments on perception; behavioral history and the set for childcare; relation with biology; conscious/unconscious and the psychology of set; science satisfies all?; about beauty; nature and nurture; literature/war/liberal arts; still psychology...

1. 私の心理学研究

1-1 知覚の実験から始める

ライフワーク

心理学は私のライフワークだということになります。それは「人間とは何か、生きるとはどういうことか」という誰もが直面するストレートな問題に、何の拍子にかそのまま向かい続けてしまった結果のようです。ところが、これらの大問題に対する「正解」に行きついた人は未だかつてもちろん誰もいませんし、いつまで追いつけても行きつくことはないでしょう。ただいくつもの異なる考え方が提示されるだけです。

また、人間や人生を知る上には、自然や社会・文化への視点も取り込まなくてはなりません。必然的に、広範な領域をカバーすることになります。しかしこれには、それこそ限界がありません。いかなる巨人にとってもそれは同じことです。ニュートンが言い残した言葉は鮮明に焼き付いています：「私は、海辺で遊んでいる少年のようである。ときおり、普通のものよりもなめらかな小石やかわいい貝殻を見つけ

て夢中になっている。真理の大海は、すべてが未発見のまま、目の前に広がっているというのに。」

順応／残効

もともと、それでも心理学を続けてきたのはその客観性、実証性、つまり科学性には頼ることができるだろうと思ったからです。また、本に書かれた人の思想や意見とそれに対する批判から自分の考えを組み立てるだけではなく、自分で立てた問いに自分の方法でデータを集めて自分の考察を行って結論に至るというのは楽しい過程ですし、自分を満足させてくれる営みでもあります。私は学生時代から知覚実験を行って、錯覚や順応／残効という現象を取り扱い、構えあるいは現実発生という枠組みから考察を行ってきました。基本的には、ウズナツゼが固定構え法と呼んだ以下のような手続きと現象です。

右側は大きく、左側は小さいという二つの円を繰り返したまたは持続して提示すると、知覚された左右の大きさの差が減少してゆくのが順応

受付：令和元年6月4日 受理：令和元年7月30日

*近畿大学総合社会学部 教授（基礎心理学・行動発達学）

です。その後で大きさの等しい二つの円を提示すると、右側が小さく左側が大きく知覚されます。これが残効です。残効は等しい円を提示しているうちに減衰し消去されます。ゲシュタルト心理学のケーラーはこの残効を図形残効と呼びました。似たような順応／残効として、線分の湾曲が減って直線に近づく順応と、その後で直線が反対に湾曲する残効がギブソンによって報告されています。

知覚が時系列的に変化する様子を見るのですが、むしろ自分の状態が時系列的に変化する過程を知覚の変化から読み取るというのが狙いです。私たちを取り巻く環境は時に変化したり、変化せずに持続したりします。変化がなければ、自分の状態を環境の特性に合わせるので知覚も順応をします。変化が起こると、変化する前の状態が影響を及ぼして知覚に残効が生じます。やがて変化した後の環境に合った状態に転換されると、残効は消えます。このような、環境に合わせた自分の状態の調節によって、適応的な行動が準備されるというわけです。

環境に合わせて調節する自分の状態を構えと呼びます。後ほど改めて述べますが、ウズナツゼによって行動の無意識的な準備状態として提唱されました。また、順応／残効などにみられるような、その場でのミリ秒単位からの刻一刻の変化を現実発生といいます。これについても追々触れてゆきます。私の行った実験からは、錯覚といわれる現象も順応／残効の効果で変化させられることが明らかになりました。また、順応／残効の実験を通して、現実発生の概念に新しい解釈を提案しました。そしてこれらの変化は生活体にとって適応的なメカニズムであること、それは行動一般に敷衍できるはずであるという考えに連なりました。

何百人もの人たちに参加してもらって大量の実験を行いました。それはいろんな面で面白い経験でした。先人たちに対する批判も行って、その理論は確実に否定できるというような証明もいくつかできてきたと思います。そしてそのような研究を学生たちに指導することも、部分的ではあってもしてきた積りです。

人間科学

しかし、実験室では方法、データ、結論の厳密さや正確さを追求できても、とらえられる範囲が狭くて普遍化が難しくなるという傾向があります。また、本当に正しければどんな小さな答えでも広い範囲に普遍化できるはずですが、その広い範囲というものが分かっていないとどんなに正しくても普遍化できません。そこで問われるのは知識の量だけではなく、知識と知識のつながりを見通す洞察力です。これによって広い範囲を総合的にとらえることができるのですが、それを支えるのはいわゆる教養の働きでしょう。

学部生、院生として11年間を過ごした大阪大学人間科学部は、いわゆる4文字学部名の走りです。1975年入学の4期生ですから本当の走りです。心理学を学んだのですが、所属した行動学専攻、比較行動論講座の名前の中には、どこにも心理学の文字が含まれていません。人間科学という大きな枠組みの中で、自然／文化人類学、生理学、エソロジー、社会学、哲学的人間学など心を惹かれる広範な領域に囲まれました。またそれらを総合してゆくという方向性にも接する中で、人間科学に対するアイデンティティこそ濃厚になっても、心理学に対するアイデンティティはあまり強くは育たなかったかもしれません。

もっとも、ならば人間科学とは何かと問われても、これも一定の答えには辿り着きません。人間とは何か、社会とは何か、自然とは何かという問いに加えて、人間科学とは何かすなわち人間や社会や自然を研究するとはどういうことかという問いにも直面するわけです。私たちの頃は、学生たちも先生方もしばしば真剣に議論したものです。学際という言葉が大きなキーワードでした。今同窓生と話しても、懐かしくその頃の様子を振り返るのですが、答えは相変わらず出ないねと顔を見合わせるものです。哲学的人間学で言うところの、開かれた問いです。それでよいのです。

近畿大学での30年余りで私の所属は教養部、文芸学部、総合社会学部の三つに変遷しました

が、普通の学部名ではないところばかりです。先に、広い範囲の知識と知識のつながりを見通す洞察力を支えるのが教養だと述べました。私はよく、今の大学の学部教育の目的は教養教育だと言っているのですが、三つともそれに沿ったものだと言えるのではないかと思います。重心の位置がそれぞれで異なるだけです。人間科学部も、まさにその先駆けだったかもしれません。専門的なタコソボないしはサイロを掘るだけでは、研究も大学も社会の活動一般も立ち行かないがゆえに、どうしても必要なのが教養に支えられた広い範囲の総合化なのです。

ロマンティックな混沌

近畿大学に職を得る前の一時期、浜松医科大学の佐藤愛子先生の手伝いで痛覚に関わる研究に携わりました。その時は痛覚に関わる言語や動作などかなり広い範囲の問題が取り上げられて、順応／残効の外の世界が勉強できました。理論やテクニックなどの幅も広げることができたと思います。鰻もよくご馳走になりました。当時はまた、発達障害関連の通園施設、クリニック、児童相談所でのアルバイトも少なからずしていました。子供の世界、それを取り巻く環境、臨床現場の社会、臨床的な方法などに接する経験から得たものは、今までずっと生きてきたと思います。その時の実績で申請すれば、立ち上げ当初の臨床心理士の資格が取れたのだけど、私は取って取らないことをしなかったとうそぶいてもきました。

近畿大学に入った時の教養部は研究室がまだ二人部屋で、私の相方は古生物学の中澤圭二先生でした。京都大学退官の大御所です。気さくに語りまた聴いて下さり、豊かな学問の世界を教わりました。しかし心理学には実験室も機器もありませんでした。ちょうど医学部精神神経科でアイ・カメラを導入したというので、郭さん、岡田さんという二人の若手医師と共同研究を始めました。「眼球運動の再生課題」という実験を、統合失調症、自閉症などの患者や小学生を対象に行いました。数年の間、三人で様々な場所へアイ・カメラを運んで膨大なデータを

集めました。これは自分だけではできない貴重な経験ですし、楽しい思い出もたくさん残っています。

38歳になってサバティカルの機会に恵まれ、スウェーデンのルンド大学に妻とまだ幼児だった二人の子どもたちと一緒に滞在しました。スウェーデンの人びと、風土、文化、そして高度福祉社会からそれこそ多くを学びました。私たちの大きなライフイベントとして忘れられない1年間になりました。交流は今まで太く長く続いています。ルンドでは知覚の現実発生に関連する研究が行われていたから訪れたのですが、実際にはそれまでの私の研究とピッタリ重なるものではありませんでした。精神分析学で言う防衛機制や創造性などもテーマにしていて、医学部の精神科にも研究室を置き、環境工学科とも連携するような広い領域を跨ぐプロジェクトでした。こういう側面でも大変勉強させてもらったと言えます。帰国後、むこうの方法や機器を導入して、創造性に関わる研究も行いました。

52歳の時にはカナダのトロント大学に半年間、今度は単身で滞在しました。受け入れてくれたウォン博士は、電子工学科の物理学者です。一見心理学とはマッチしないかのようにですが、聴覚や共感覚の研究者でもあり、最初に出会ったのは国際心理物理学会が1996年にイタリアのパドヴァで開いた年次大会の時です。理論にこだわる哲学者でもあります。そして流暢な関西弁をしゃべります。トロントで私はヨーク大学の太田先生の薫陶も受けました。立体視研究の大御所です。文化人類学の研究者とも交流を持ちました。研究はもちろんのこと、カナダの人びと、社会、文化、自然から多くを学んだのは言うまでもありません。

色んなことをわけも分らずにやってきたものです。しかし今こうして振り返ってみると、研究や関心の領域を広げるような活動を随分と盛んにしてきたものだと思います。それがその後の研究の血となり肉となったと思います。それから、多くの人たちや組織の支援や協働に恵まれて、これもその後の人生の肥やしになった

と思います。また、その人たちと苦楽を共にした思い出も今は懐かしく思い出されます。こうしたロマンティックな混沌が、私にとっての人間科学の大事な一面だとも思います。

1-2 行動誌と育児の構え

行動誌

知覚の研究については40歳代の初めに学位をもらったのですが、同じ頃に、上で述べたような広い範囲を取り扱う枠組みとして行動誌という考え方を提案して、「行動誌入門」という本を1997年に出版しました。進化すなわち生物種が変化する系統発生、発達すなわち個体が変化する個体発生、そして現実発生というその場での行動の変化、これら三つの発生の時間軸から行動の成り立ちを考えるという試みです。

行動誌を英語にすると behavioral history です。これには本歌があって、中村桂子が系統発生と個体発生とを束ねる生命誌を提唱して biohistory としたのをなぞったものです。そのまた本歌は、自然誌(史)/博物学の natural history になります。そもそも諸事物は発生の過程からこそ関係や性質を明らかにできるはずで、歴史を物語ることで一般的、普遍的な本質が浮かび上がると考えたのです。そう言えば、子供の頃には歴史に興味を持って考古学者になりたいという夢を描いたこともあります。

知覚の研究の主題は自分の状態すなわち構えの、その場で推移する時系列的な変化ですが、このような変化を現実発生として位置づけています。進化も発達もそれぞれ時間のスケールは違うものの、同様に時系列的な変化です。知覚の順応/残効について述べたように、その時その時で環境と折り合いをつけながら自分の状態を調節するような過程を問題にするのは共通です。その時点毎の適応が目指されるのですが、当然状況の変化に伴って適応の仕方も変化します。しかしそこに一貫した原理も働いているはずで、このような時系列的な変化が私の心理学研究全体の主題だと言ってよいでしょう。

進化にしても発達にしても、進歩、前進、改善といった価値を含んだ意味を込めてよく使わ

れる言葉です。しかし進化も発達もまた現実発生も、ここで言う発生は今述べたような時系列的な変化そのものです。あくまでも変化であり、それ以外の価値観は混じり込みません。創造説の価値観からすれば、完全なる神が作った中で最も完成に近づいたのが、人類の、成人の、男性ということになるでしょう。しかし行動誌では一元的な軸に沿った完成とか理想とかは考えません。従って、それに向けた進歩とかいった意味も含まれないのです。

現実発生の概念も、従来は未分化で不明瞭な知覚が分化され明瞭な知覚に完成されるという過程を指していました。それに対して私は、分化されて明瞭になった後の過程もとらえ、そこで生じる順応/残効も現実発生に含めることを提案しました。完成された知覚などというものは無いのです。知覚の研究者は、知覚とはそもそも錯覚的なものであるという言い方をよくしますが、同じような意味になるでしょう。知覚に限らず、思考や記憶などの認知過程においてもあるいは行動全般においても、完成や理想という考えは不要だと考えます。認知バイアスという言葉がありますが、バイアスのない認知というのも無いと考えるのです。

育児の構え

この行動誌に背中を押されて、また学内の組織替えで卒論生の数が増えることもきっかけとなって、私は発達の問題にも取り組むこととなります。そもそも大阪大学で川口勇先生の指導を仰いだのは、先生が元来幼児期の発達を研究されていたからでした。また、その当時からパウワウらの乳児の研究に強い興味を持っていました。そして、幼稚園あるいは発達障碍児の施設などによく出入りもしていたものです。そこで今度始めたのは、「赤ちゃんはなぜかわいか」、「養育者はなぜ子育てをするのか」という問いから入った、育児の構えと呼んでいる実験的研究です。

子育てはいわば24時間365日の厳しい労働ですが、多くの場合ほぼ確実に実行されます。従って何らかの遺伝的プログラムが、母性神話

という文脈の母性本能とは別物ですが、大事な役割を果たしているのは確かです。誰からも教わらないで子育てを完遂できるような動物たちを見れば、そして進化の連続性を考えれば、遺伝的プログラムが人類にも備わっているであろうことは明らかでしょう。動物の本能行動を研究するエソロジーでは、ベビーシエマが子育てあるいは攻撃抑制の鍵刺激だとされています。丸顔で額が広い乳児の特徴が、人類にも鍵刺激として働いてかわいく見えるのも明らかです。

ところが人類というのは、生存のために食物を摂取するのにさえ、食材の入手や調理、食器の使い方まで学習しないでは何もできない学習動物です。遺伝的プログラムだけで放っておいては子育ては完遂されません。しばしば躓いたり転んだりもします。人類の子育てには一定の経験や環境などの条件が必要なのです。そこで女子学生を対象にして、乳児と接触した経験の度合いと乳児の画像や音声の評価との間の関係を調べました。中国人の留学生は中国のデータも集めました。実際に女子学生に乳児と接触してもらった実験も行いました。

この研究では、乳児と親、実験参加者、画像や音声の提供者、web ページ制作者、保健所の保健師さんたちをはじめ、多くの人たちから協力をいただきました。それには友人、同僚、卒業生、行きつけの店の主人などの個人的な善意による協力も含まれます。人手のかかる実験やデータ整理に、ゼミ生たちもよく協力してくれました。学生が本物の乳児と接することを本当に喜んでくれるという場面もしばしばでした。多くの親御さんも幸せな雰囲気をいっぱい振り撒いてくれました。実験の打ち上げではよく寿司パーティーを開いたりもして、楽しく充実したという体験を分かち合えたときもあります。

結果から、やはり乳児との接触経験の多い方が、乳児の画像や音声を肯定的に評価することが分かりました。しかも、接触経験は思春期以前よりも以降の方が効果の大きいことも分かりました。ある種の敏感期に遺伝的プログラムのスイッチをオンにするようなメカニズムを示唆しているとも考えられます。また、接触経験

の効果は他の表情よりも泣き顔の評価において顕著でもありました。乳児の泣きは一種の緊急信号です。泣き声を聞いただけで母乳があふれてくるような場合もあります。しかしそのような重要なメカニズムが遺伝的プログラムにビルトインされているとしても、一定の経験を経て準備されていないと機能しないのが人類なのです。泣いている乳児は鬱陶しい、だけで終わってしまうのです。

しかしいくら学習動物とは言え、子育てに関する全てを一から十まで学習するのは大変です。母親になってからいきなり始めたのでは間に合いません。あらかじめ行動がどのように形成されるかが遺伝的に準備されていると考えた方が合理的でしょう。後ほどまた詳しく論じますが、学習の鑄型と呼ばれる遺伝的プログラムが学習を準備していると考えられます。大事なツボで一定の経験をするだけで簡単に学習できてしまうようなメカニズムです。そして学習の鑄型には学習の敏感期も考えられています。

さて、同じ乳児を前にしても自分の状態によって受け止め方やかわかり方が違ってくる、だからこれも構えなので、育児の構えと呼ぶわけです。乳児との接触経験によってそれは変化します。また、乳児が泣いたり泣き止んだりすることでもそれは変化します。遺伝的プログラムを内包しながらも、機械的に刺激に対する反応をするのではなく、経験や乳児の変化に応じてその時その時の行動が無意識のうちに調節されるのです。

そうして、遺伝的プログラムと環境や文化との関係も考察しながら書いたのが、2012年に出版した「子育ての理由」という本です。エソロジー、社会生物学、行動生態学などの生物学分野の知見も参照しました。そして、環境や文化は遺伝的プログラムとマッチしている必要があるという指摘を行いました。例えば、ベビーシエマが鍵刺激として乳児をかわいく感じさせるのを利用すると、アニメのキャラクターをかわいくできて、人気が上がります。アニメという文化が遺伝的プログラムとマッチすることで成功を取めるわけです。マッチしていなければ

淘汰されることとなります。私たちが学習して身に着ける文化にはそういう生物学的な側面があるのです。これはまた、攻撃、求愛その他の場面にも一般化することができますと考えます。

少子化、出産の高齢化、働く母親の割合の増加、親の労働時間の過多、労働環境における性差別、保育施設の不十分、保育士の不足と労働条件の不備、幼児教育の内容や量等々、子育てを巡る社会・文化的課題は山積みです。社会科学的な発想や研究アプローチが求められるのは当然です。私も真面目に考えなくてはと思っています。ただこうした問題にも、生態学、エソロジー、進化生物学と重なる部分が多いであろうということは覚えておくべきでしょう。全てを生物学的な説明に委ねようとするのは非常に危険なことでもありますが、一歩退いて広く眺めると新鮮な発見があるはずで

動物の行動研究

こうして研究室では、知覚の順応／残効と錯覚、育児の構えという二つのプロジェクトを進行させて、学生たちに卒業論文や修士論文を書いてもらいました。そして次に三つ目のプロジェクトとして始めたのが、動物の雌雄や親子の間の行動研究です。これも、そもそも子供の時には動物図鑑が愛読書だったこと、学生の時に飼育・研究されていたサルと身近に接していたことなどの背景があります。そしてこれで進化、発達、現実発生という行動誌の三つの軸がとりあえず揃うことになりました。

まず天王寺動物園にお願いして、卒論生たちにテナガザルとカンムリヅルの観察をさせてもらいました。これは動物園からも私の出身研究室からも協力をいただいて実現しました。多くの哺乳類では授乳期間中は排卵の抑制される傾向があります。それに伴って交尾も抑制されます。しかし観察したテナガザルの雌雄ペアは、授乳を続けているのに交尾も続けていました。その間に親密さの度合いを深めてゆきました。ある意味でこれは人間的とも言えます。交尾は繁殖のためだけでなく、専ら雌雄の関係を強くする役割で行われることがテナガザルにもみ

れるのです。

このように、心理学研究を細々とまた遅々と続けてきたのですが、同時に、心理学に内在する問題にも思いを巡らせてきました。ここでは二つの問題について述べてみます。一つは心理学の生物学との関り方の問題です。もう一つは構えの心理学を軸とした意識／無意識の問題です。

2. 心理学の問題

2-1 生物学との関り方 生物学主義

動物園での行動観察はもとより、育児の構えの研究でも生物学的な色合いの強いことには既にお気づきでしょう。大学入試の理科の選択科目は生物でした。教養課程の講義で印象の強かったのは生物学のゴキブリのフェロモンにまつわる話です。大学院生の時に授業で輪読したのは、古生物学者シンプソンの「The Meaning of Evolution」という古典的名著とされるテキストでした。当時の人間科学部は、心理学専攻ならぬ行動学専攻の院生がこのような教育を受けるのも自然なことであるような環境だったと言えます。

心理学では戦前戦後に米国流の行動主義の勢力が強くて、行動科学という名称も使われていました。しかし人間科学部ではそうでもなくて、むしろそれに対抗したドイツ流のゲシュタルト心理学に親和的な先生が多くを占めていました。そして、ゲシュタルト心理学に親和的であると同時に、生物学的アプローチにも親和的であったと思います。それゆえ学内と岡山県にニホンザルの行動観察の施設も設けられていました。また、行動生理学と行動生態学の教授は医学部の出身でした。専攻名が心理学専攻ではなくて行動学専攻だったのには、このような背景があったと思います。

ゲシュタルト心理学にも様々な流派がありましたが、ケーラーの心理物理同型説は脳の生理過程に注目するものでした。また、ケーラーによるチンパンジーの洞察の実験は人類との進化的連続性を明らかにしています。メッツガー

のカモフラージュの研究はエソロジーとつながるものでした。ちなみに、前述の現実発生もゲシュタルト心理学に起源を持っています。そのような生理学やエソロジーが、また形態学や発生学が人間科学部には講座の単位で研究されていたのです。この部分ではいわば生物学主義です。心という目に見えないものを科学する上では、必定このようなアプローチが考えられるものでしょう。

これに私も相当染まったわけです。ことに進化や発達に注意の向くには、これが影響しているはずです。学部を卒業する頃、京都大学霊長類研究所のアイに会いに行きました。図形記号を言語のごとくに使いこなすチンパンジーです。人類の行動との近さ、進化的連続性を目の当たりにできました。その後も繁殖や子育て、共感や助け合い、攻撃や欺瞞などの行動で、類人猿と人類との類似や相違を明らかにする研究が進むのに関心を寄せ続けることになりました。例えば、心の理論という研究が発達心理学と霊長類学の双方で共に進展したことなどは非常に面白いと思います。

身体という問題も見逃せません。まず、進化とは生活体の機能と構造とが結びつき合いながら展開するものです。行動を生活体の機能に位置づけると、それに対して身体を生活体の構造に位置づけることができます。そういう観点から機能に対応させて構造をとらえるのが形態学です。そう論じていた人間科学部の熊倉君は、直立二足歩行の進化を研究するためにサルを調べていました。あるいは手を見ればその人の仕事に分かり、歯を見れば食生活が分かります。行動と身体、機能と構造との結びつきは目に明らかなのです。

それから、例えばコンピューターで脳のシミュレーションができたとしましょう。しかし脳だけでは心を再現することはできません。行動をして生活をしてゆくには目耳鼻口や手足などの身体を使わなくてはならないからです。感覚器官、運動器官として身体です。そして身体からのフィードバックで行動の調節も行われます。身体を持たないコンピューターは心も持て

ないこととなります。脳・神経系を含んだ身体全体を考えないと心は見えてこないのです。

生物学と心理学

「人間とは何か、生きるとはどういうことか」という問いは、進化の産物としての人間、進化の産物としての行動や社会に向けられた問いだと言えば極論になるでしょうか。心理学で明らかにしようとする法則や結論は、そもそもが生物である人間の特質を知ること尽きるなどと言えれば行き過ぎた生物学主義でしょうか。「人間の」とか「人間が」とかで始まるセンテンスには、「他の動物と比較して」という暗黙の前提が含まれていることにはならないでしょうか。個人間の共通性や多様性を論じるには、互いに種を同じくしていることが条件になるでしょう。それは、種間の比較をするには、それぞれが種として独立していることを条件とするのと同じです。私にはずっと気になってきました。神の創造した被造物というくびきを離れ、また観念論から解放されることによって、人間の存在は進化の産物として一義的に位置づけられるのではないかと。

そこまでは生物学主義を振りかざさないまでも、発生、比較、適応など、生物学と心理学とで相互乗り入れの可能な論点があること、そしてそれが重要であることを私たちははっきりと自覚する必要があると思います。ドーキンスが「利己的遺伝子」を出したのが私が学生だった1976年のことですが、それ以降の進化生物学の世界では、人類を含む動物の行動の説明に大きな展開があったと思います。またそれに影響された心理学研究もどんどん増えてきています。進化心理学がもてはやされたりもします。ただ、発生、比較、適応などの基礎的概念が心理学の側でどれほど固められているかには不安が残ります。

例えば、ごく基本的な適応という概念にも心理学と生物学とではズレがあります。実は困ったことに、心理学では価値相対的などころがあつて、なかなか曖昧な概念だと言わざるを得ません。私は授業では「適切な場面で適切な

行動をすること」と、一見意味不明の言い回しもあります。授業中に急に立ち上がって大声で歌を歌いだしたら、いくら名唱でも適切とは言えません。片や、いくら音痴でもカラオケで熱唱して喝采を受ければそれが適切でしょう。この比喩は後でも用います。あるいは、不適応を反対の概念と考えれば分かりやすいかもしれませんが、トートロジーになりそうですが、不適応とされる状態に陥らずにその環境で生きられているのが適応だというわけです。それから不適応は回復可能です。これに対して生物学では、絶滅しないで生き残るという単純で明快な結果が適応とされます。もっとも、心理学的に適応することが生物学的な適応に帰結するというのも重要です。このような概念や思考のスタイルの差異や類似は心得ていなくてはなりません。

それから、生物学主義に傾くと往々にして還元論に陥ります。もちろん、遺伝や進化で全てが説明できるというのは、経験や発達を無視した乱暴な考えです。また例えば、先程の話からすれば心理過程というのは脳・神経系を含む身体の過程によって成立しています。そこで、目に見えない心の働きを目に見える身体の働きに還元できるという考えもあります。しかし、身体が分かれば心が分かるというものではありません。水は H_2O という分子から成立していますが、 H_2O の分子が分かれば水の性質が分かるというものではないのと同じです。問題と解答との次元がずれているのです。脳科学と称するものにはしばしばそのような傾向が見受けられるようです。学際的視点は大変重要なのですが、そこには問題の立て方や方法上のルールが必要なのです。

世の巷や卒業論文で「脳がそのように感じている」といったような表現をよく目にしますが、私はその度にイラっとしてしまいます。その時、私がイラっとしているのがあって、脳がイラっとしているのではないからです。私はイコール脳ではないのです。それでは私って何でしょう。イラっという感情は私の意識に登ってくるのですが、私はイコール意識でもありません。私の意識を含む行動の過程さらに人格全体

は、私の無意識の働きによって支えられているのです。次にそういう問題を考えてみます。

2-2 意識／無意識と構えの心理学 意識主義批判

学生の時に会って、今でも最大の影響を受けていると言えるのは、川口先生から教わったウズナツゼの構えの心理学とそれに基づく心理学批判です。その頃はまだ現存していたソヴィエト連邦には、モスクワ＝ハリコフ、レニングラード、ジョージアに三つの学派が立ち上げられていましたが、ウズナツゼはジョージア学派の創始者です。ジョージアの首都トビリシでトビリシ大学と科学アカデミーを学派の拠点としましたが、私は二度トビリシを訪れることになります。まだソヴィエト連邦の時代です。その後ソヴィエト連邦が無くなってからですが、英文の博士論文の審査をするという機会もありました。

最初に川口先生から教わったのはレニングラード学派のルビンシテインによる意識主義批判でした。これは端的に言ってデカルトの二元論に基づく内観、すなわち自分の意識で自分の意識を意識するという方法の批判に行きつきます。このあくまでも主観的な行為による方法は、客観性、実証性を旨とする科学としての心理学の要件を満たすものではないということです。デカルト以後の、英国経験主義の連合心理学も、心理学の開祖とされるヴェントの内観も、無意識に光を当てたとされるフロイトの精神分析も、これと同じ平面にとどまっていたとされます。歴史を逆に遡れば、狩猟採集時代のアニミズムの精霊や魂、あるいはプラトンのイデアも含めて、観念論の系譜としてとらえられます。観念論の否定という命題、弁証法的唯物論あるいはマルクス・レーニン主義のイデオロギーとの整合性という命題も担っていたのでしょう。しかしそれを差し引いても、このように意識／無意識の問題に正対する姿勢は心理学に常に強く要請されると思います。

ウズナツゼも、構えの概念を中心に据えた無意識の心理学の立場から意識主義批判を展開し

ました。例えば、英国経験主義の連合のアイデアは、同時代のニュートンの万有引力の発見に触発されたことを示唆しています。物体と物体とが引っ張り合って引っ付きあうように、外的事象と観念、また観念と観念も直接に自発的に引っ付きあって連合されるという話です。ウズナツゼはこのような連合の説明を「直接的・自発的連関」と呼んで否定しました。外的事象が意識現象の直接的な原因になったり、意識的現象が直接的な原因となって別の意識的現象を引き起こすというという「閉鎖的因果関係」では心のメカニズムは説明できないとしたのです。これも観念論の否定につながります。

ジョージアの心理学用語で構えは *განწყობა* (*gants'q'oba*) ですが、一般の用法では気分、ムードという意味を持っているようです。意識以前のモヤッとした状態を表しているでしょう。ウズナツゼによると、まず構えという無意識の準備状態が、外的事象と内的要求に応じて一次的に始まります。これに準備されて行動が二次的に引き起こされます。そして意識的現象は、二次的である行動に付帯して現れるのです。

ウズナツゼは意識は客観化を契機に生じると言います。行動が構えに準備されて開始され、円滑に進行している限りは意識に登ってきません。無意識のうちに運ばれます。しかし何か支障などが生じて進行が滞ったとき、外的事象や内的状態が客観化されてそれが意識に登ってくるというわけです。無意識裡に行動が始まって、行動が既に進んだ後から意識は現れるのです。心の過程は、構え、行動、意識という順で継起することになります。

ただし、いわゆる反射も無意識の過程ですが、構えが働く要件である外的事象と内的要求のうち、内的要求がどれほど関与するかには議論の余地があります。従って、反射を準備するメカニズムが構えに含められるかどうかは難しいところですが。一方、無意識に行動を準備するメカニズムとして、鍵刺激が解発する生得的解発機構もあります。行動主義的な観点からなら、一連の行動の連鎖である生得的解発機構は

反射の集合だともできるでしょう。しかしエソロジーが論じた生得的解発機構では内的要求が重要な要因になります。この意味で、構えの範疇に含めることが可能だと考えられます。

このように、構えが外的事象と行動や意識との間の媒介となることで、心的過程の因果関係は外的事象から無意識の構えへ、そして無意識の構えから行動へ、さらに意識へという方向になります。逆の方向で、意識から無意識への影響あるいは意識現象間の影響も考えられますが、それはあくまでも二義的なことだとします。ウズナツゼは思考も構えによって決定されるとして、実験的研究で検証しています。

行動の方向づけ

そして、構えには外的事象に対応するために行動を調節する働きがあります。先に知覚の順応／残効に触れた折に、「環境に合わせた自分の状態の調節によって、適応的な行動が準備される」と記した通りです。適切な場面で適切な行動をする調節です。これには二つの側面があると私は考えます。本稿を書き進めながら二つの区別に気がついたのですが、それは、大元の方向づけと細部の調整です。

構えによる行動の方向づけは主体の要求とそれを充足させる事態とによって決まります。講義を聴きたいのか歌いたいのかと、授業中なのかカラオケ店なのかによって決まるわけです。ゲシュタルト心理学のいわゆるベクトル心理学とよく似たイメージだと思います。ベクトルの矢印が行動の方向とその動機づけの強さを表しますが、要求を充足させる対象が位置する方向と要求の強さとにそれぞれ符合するでしょう。

ジョージア語の *განწყობა* (*gants'q'oba*) を移した他国での用語では、意識されない気分というニュアンスよりも、調節という意味合いが濃いようです。ドイツ語では *Einstellung* となっていて、調節、調整、設定といった意味が入ります。カメラのアングルをとるのも *Einstellung* で、まさに被写体への方向づけです。ロシア語の *установка* (*ustanovka*) は *Einstellung* に近い

ようです。英語の set も Einstellung に近いようですがどうも分かりづらく、私としては setting とした方が滑らかに感じます。そして日本の用語としての構えは、しばしば混同される態度という用語とは異なるのですが、なかなか分かりづらいものです。

方向づけの比喩としては、カメラのアンクルほどはびったりしないかもしれませんが、構えをコンピューターの Windows のようなオペレーション・システムに、行動をアプリケーションに例えて議論したこともあります。適切な課題解決に適切なアプリケーションを、という役割です。どの行動を使って問題解決をするのかを、大元から管理して方向づけるのが構えだということです。

この方向づけが固着してしまったらどうなるでしょうか。ウズナツゼは構えの固定を論じています。同じ事態に繰り返し出会うことで構えが固定されると、事態が変わった時に転換しにくくなります。そのまま固定された古い構えが働いて、知覚では残効が生じることとなります。構えが般化して、異なる場面でも働くわけです。日常で見られる慣れもこれです。何も考えずに車を出していつも通ってる道筋を辿ったところ、気がつけば今日の行き先は別の方角だった、といった経験もままあることです。ここでは、何も考えずに、というところが肝心で、まさに無意識の過程であることを示しています。気がつけば、というのは行動が滞って客観化が働き、意識に登ってくるという過程に当たります。

ウズナツゼは構えの固定によって生じる残効を構え錯覚と呼んでいます。本稿の最初の方、順応／残効のところで紹介した二つの円の残効がそれです。そこで述べた通り、ケーラーもギブソンも別の研究文脈で同様の残効を扱っています。ウズナツゼはこの残効の実験手続きを固定構え法と名付けて、構え研究の中心に据えました。ただしウズナツゼもケーラーも順応については取り扱っていません。順応の過程に注目したのはギブソンと私です。

エソロジーの鍵刺激と生得的解発機構の概

念も、構えによる方向づけと似ていると思います。繁殖期の雄のなわばりに雌が現れば求愛をし、ライバルの雄が現れば攻撃をするというのが、適切な場面での適切な行動です。授業中は歌わず、カラオケでは熱唱するというのと同じです。ところがこの方向を誤って、逆をしていたのでは子孫を残すことができません。この場合は、行動レベルの適応が生物学的レベルの適応と直結することになります。こうした視点から構えと遺伝的プログラムとの関係も考えることができるでしょう。行動の方向づけが遺伝的プログラムに支えられているとすると、構えには進化の産物としての側面が考えられるのです。ウズナツゼは固定構え法を様々な動物に適用した知覚実験を行っていますが、エソロジーのような種固有の行動様式にまでは言及していません。

細部の調整

細部の調整については、ウズナツゼは構えの分化という説明をしています。初めて出会った事態や、出会ってから時間の経っていない事態では構えは未分化で、行動も未分化です。それが、出会いが繰り返されたり延長されるに従って、事態の細部にまで対応するように構えが分化され、行動が分化されます。カメラに例えれば、ピントを合わせて像をはっきりさせるようなことでしょう。ウズナツゼは現実発生には言及していませんが、これは現実発生と同じ過程だと言えます。知覚の順応／残効に触れた際に述べたように、この先に順応が進行します。

細部の調整に当たっては、行動が始められた後の外的事態からのフィードバックが大きな役割を果たすことになるでしょう。ウズナツゼの後継者たちの時代はサイバネティクスが席捲した時代に当たりますが、こうしたフィードバックに目が向けられていたようです。これが何重ものループを成して構えの分化が進行するわけです。十分に適切でなければ十分になるまで適切にする、という過程です。ここで繰り返しを伴う経験が大きな役割を果たすことは明らかでしょう。

これは、学習に構えのプロセスが働いていることを示唆するものでしょう。条件づけも固定構え法と同様に同一の試行の繰り返しから成り立ち、それがその後の試行に及ぼす影響を見るものです。条件づけの文脈における分化の進行も、構えの枠組みからとらえることができるはずで、条件づけの学習心理学と同様、ウズナツゼも前述のように固定構え法を様々な動物に適用した実験を行っています。また、構えの一般化についても論じています。

以上のように、構えが行動を調節する役割は、大元のところで方向づけをした上で細部の調整までするということだと思います。カメラの角度を決めた上でピントも合わせたところで初めて写真になるようなものです。角度を変えるとピントも変えなくてはなりません。残効は、角度を変えてもピントが前のままだとピンボケになるようなものでしょう。

大元の方向づけをするためには、全体を総合的にとらえている必要があります。細部の調整をするためには、部分を分化してとらえている必要があります。全体と部分を、総合的にかつ分化してとらえることをゲシュタルト心理学では分節化と呼びます。実は、川口先生は構えの心理学に出会う前、幼児期の分節能力の発達を研究されていました。ウズナツゼは分化という言葉を使い、分節化という言葉は使っていませんが、おそらく構えに分節化の機能を考えたのだと思います。分節化は、学問や教育などを含む認識一般を語る上でも極めて重要な問題だと考えます。例えば大学における細分化された専門性を跨いだ総合、すなわち教養の機能が学問や教育全体の分節化と結びついていると考えられるからです。

無意識の媒介

ウズナツゼはこうした構えの働きが、ゲシュタルト心理学のアッハの唱えた決定傾向と似ているとしながら、決定傾向は意識のレベルだけにとどまっていると批判しています。動物や乳児、つまり私たちのような観念や意識を持たない生活体にも当然構えは働いて、適応的に

生きてゆくことを保証しています。観念や意識はこれを土台にして成り立っているのです。神が授けてくれたとかいう考えとは無縁です。

進化や発達という発生過程から考えても、意識的現象の直接的連関よりも構えという媒介を措定する方が整合的なのです。内的過程の因果関係は、外的事態との媒介となる無意識の構えから、無意識の行動、そして意識へという方向でこそあっても、意識的現象の直接的因果関係ではないのです。現実発生についても、それは未分化で曖昧な内容が分化して明瞭に意識される過程を含むので、無意識から意識へという方向が同様に当てはまります。同時に、構えという無意識の媒介を措定することは「存在が意識を規定する」という図式との間でも整合性が成り立ちます。

私は質問紙を使ったこともあります。なるべく使わないようにしてきました。使う場合も、かなう限り行動を客観的に問うことを心がけてきました。なぜなら、質問紙では第一に言語による質問という観念の働きを用います。第二にそれに回答するのは内観という意識過程に他なりません。このようにして観念や意識をとらえることは主観の世界にとどまるからです。これはデータのレベルで意識の範囲にとどまるだけではなく、考察、説明のレベルでも意識的現象の直接的因果関係にとどまってしまうことにつながります。

質問紙を用いた調査で、例えば自己効力感とか自尊感情とかの意識過程を測るような場合を考えてみます。それらの間に統計学的な関連が認められ、一方が他方の直接的な原因になっているとされても、安易に納得してしまうわけにはいきません。意識過程とは異なる、構えのような要因が両方の意識過程を根元のところで決定しているという考えを捨てるわけにはいかないからです。

もっとも、ウズナツゼは固定構え法を用いることによって構えを実体概念として扱うことができると述べていますが、私はそこまでは言えないと思っています。ジョージア学派によって、知覚実験を中心にその性質を探る企ては成

されたのですが、構えの内容はまだまだ明らかではなくて、私に不満は多く残っています。実験内容に対する疑念も少なからずあります。私にとって構えはやはり構成概念でありブラックボックスに近いとも感じられます。

3. 大きな海

3-1 科学でこと足りるのか

科学の問題点

生物学との関り方の問題も、意識／無意識の問題も、自分なりに、科学としての心理学の問題点を整合的にとらえたと思っていました。ところが齢を重ねるにつれて、科学そのものへの疑問も頭をもたげてきました。科学で扱える小石や貝殻だけではなく、真理の大海というものも気になってきました。

心理学は科学として、客観的で実証的でなければなりません。そして論理が整合的で、結論は普遍性を備え、言語・数・記号で表現されなくてはなりません。これは理性に訴える合理的な方法です。そして科学的な方法、合理的な認識や表現は、今の社会に生きて生産や問題解決をする上で実際に効果的、効率的です。そして不正に対して正当をはっきりと主張することもできます。

しかし科学の方法は元来、ある事象の中から一つの問いだけを取り上げて一つの答えを目指すものです。人間であれ社会であれ自然であれ、何かの事象の全体をすくい上げようとしても大部分はこぼれ落ちてしまうのです。すくい上げて言語で表現しようとしても、大事なことが漏れてしまいます。また、理性に沿わない部分も重要なのに、なじみにくいものです。それゆえ、芸術・芸能、文学、哲学、思想などの認識や表現が重要な役割を担うことになってきます。科学は近代が生み出した合理的な認識や表現の一様式であり、それだけで万能でも完璧でもなく、他の様式と補完し合うべきものでしょう。

そして大きな問題として言語の性質が立ちほだかってきます。そもそも言語は一つの事象の全てを取り出して伝達できるものではありません。ある角度から限られた側面をとらえられる

だけです。さらに同じ文言でも相手によって、文脈によって、その時その時で伝わり方が変わってきます。ところが、科学に限らず学問一般で使う言葉や記号は、誰にでも常に同じ伝わり方をしなければなりません。そこでたいてい用語の定義をすることから始めます。しかし定義をしてしまったとたんに、相手や文脈によって変化するような、元々は含んでいたはずの内容がそぎ落とされてしまうのです。同様のことはビジネスや行政などの文書についても当てはまります。これは認識とコミュニケーションに関わる根本的な問題ですので、心理学にとっても大きな課題であり続けるでしょう。

私の心理学研究の姿勢は、先に述べたように生物学主義に傾く度合いを強めていました。しかしそれに連れて、人文学や社会科学とのつながりを弱めることに対する危機感、あるいは真理の大海を見失う危機感も募っていました。何か事がうまく運んだり運ばなかったりする理由の多くは、社会や文化の中に見出されるものでしょう。知覚の実験をしている分には専ら実験室の中の個人に目を向けていればよかったです。子育ての問題となると対人的関係や社会・文化に重心が移動してきます。そういう意味で、危機感には必然性があったとも言えます。新設の総合社会学部という環境で社会科学が身近になったことも影響したと思います。人文学や社会科学への関心が徐々に強くなってゆきました。

ここ数年は近現代史や政治、社会などに関わる本などを読むようになってきました。自由とは何か、それを侵すものは何かとかについて考えることが増えてきました。社会の中の様々な人格の侵害やその究極である戦争について知ろうとしました。平等と格差、公平と差別、民主主義、権力、公正、人権等々といった問題や、それらを社会の構造や文明の歴史からとらえる方法などに関心が向いてきました。歴史学者のハラリが、私の行動誌の大幅拡大版のような「サピエンス全史」を出したのには大いに衝撃を受けながら、夢中で読みました。

富永仲基

そんな最中の2018年11月に医療休暇に入ってから、心理学を離れて思想、文学、芸術などを覗き込み始めました。そこではこれまでよく知らなかった、あるいはよく理解できなかった巨人たちに何人も出会いました。森鷗外、フォークナー、大江健三郎、小田実、加藤周一、鶴見俊輔、樋口陽一、ヴァレリー、葛飾北斎……。

中でも目をひかれた一人が加藤周一です。医学を修めて血液学の研究者になってから評論活動に身を転じて、文学、芸術、思想、政治等々実に広範囲な事象を扱い、しかもそこには一貫した視点、論理、哲学が読み取れるものです。それは医学の科学的方法と通底しているかのようには思われます。彼に誘われて新たな出会いにも恵まれました。

例えば江戸時代の町人学者で儒教、仏教、神道に批判を加えた富永仲基について、加藤周一は湯川秀樹と対談したり独自に戯曲を創作したりして取り上げ、高く評価しています。富永仲基の唱えた加上は仏教の諸經典間の関係をとらえたもので、古い經典に異なった教説を加えることで新しい經典が成立してきたという法則です。つまり經典の成り立ち、発生について時系列的な関係をとらえていて、それこそ系統発生的な法則を提言していると私は思います。しかもダーウィンよりも1世紀先んじています。

どの經典も同じようにブッダの教えを表しているなら、どれも同じようにありがたいことになるわけですが、加上の考え方に基づけばより古い經典ほどブッダの教えに近いこととなります。実際に、ブッダは經典を一冊も書いたわけではなく、經典はその弟子や後継者たちが後世に次々と書いていったものです。そういう意味では最初期の經典集であるスッタニパータにブッダの教えが一番忠実に残っているというのは中村元が指摘した通りでしょう。同様のストーリーはキリスト教の聖書などについても当てはまるはずです。

このような考えを18世紀前半の大阪で、しかも31歳で夭逝した町人学者が独自に生み出

したというのは畏敬すべきことでしょう。私はこれを系統発生的法則だと言いましたが、医学者の加藤周一や物理学者の湯川秀樹が高く評価したのもよく納得できます。今日の人文学、社会科学でもこのような歴史的、発生的アプローチが、既に大いに有力なのだろうと推測できます。また加藤周一の論の展開には多かれ少なかれ、こうした時間的な系統関係の視点が常に含まれていると思います。

何のことはない、心理学という科学を離れて諸学の大海を覗き見ようと思ったのだけれど、ほんの少し垣間見ただけでも学問の方法には予想以上に共通し合う部分がみられた、あるいは私にバイアスがあってそのように共通し合うと思われたところだけに共鳴した、ということでしょう。学問一般というものは私がこれまで心理学という科学について考えてきたことと大きくは異ならない、のでしょうか。だとすると、先に科学の不完全性や他の領域との補完の必要を述べましたが、これは学問全体の不完全性なのかもしれません。

3-2 美しさを巡って 感情に訴えるのか

ならば次は学問を離れて文学や芸術などの表現だ、と筋道を立てたわけではありませんが、小説もいくらか読み、以前から親しんでいた落語や文楽にも足を運びました。今さらそれらの評論をすることも、あるいは美学に口をはさむこともかないませんが、いくらか感想めいたものを記しておきます。

最初に少々指摘しておきたいのは感情という言葉についてです。一般に、文学や芸術が訴えるのは、感情に対してだとよく言われるようです。これは、学問では言語が概念、論理、事実などを、思考や記憶の過程に伝えることとの対比です。しかし私は、感情は訴えられた結果現れるものの一部に過ぎないと考えます。これはやはり先程の構えの話です。文学や芸術が訴えるのは無意識の過程に対してであって、ここが媒介となって行動や意識的な現象も現れると考えられるのです。笑うからうれしいのか、うれしい

から笑うのか、という議論がありますが、笑うという行動もうれしいという感情も、構えという無意識の過程が働いた結果の現象ということになります。無意識の過程に起因するものには言語化できない部分、それこそ行間に隠れる部分が多く、それを表現するのに一般ではひとまず感情と呼んでいるのではないのでしょうか。

文学や芸術は意識されない仕草、発声、動作、知覚、嗜好などにも影響するでしょう。結果として生じる意識過程には表象、言語、思考、記憶などもあるでしょう。時には受け止めた人の人格を変容させるほどの影響を与えるわけですが、これは構えが人格を形成するからに他ならないこととなります。ウズナツゼは構えは全人格的であるという命題を唱えています。ただし、これについては、肯定するジョージアの学派と否定するモスクワ＝ハリコフの学派との間で論争があったようです。

人格とは一人の人間の全体を指すと私は考えます。単なる心理諸過程の寄せ集めでもなく、性格テストで測る要因の寄せ集めでもなく、部分をつなぎ合わせた全体にこそ初めて現れる質を持ちます。そして、仮に自分と全く同じクローンがいたとしても、自分とそれとは人格は異なるというような一回性を帯びます。サンプルが1個なので実証科学のまな板にはなかなか載りません。意識や言葉でとらえきれものでもありません。しかし本当は、何事でもそのような全体的な人格まで考えておかないと、人間やその行動に向かい合うことはできないのだとも考えられます。文学や芸術はこの意味でも心理学を試す問題になると思います。

文学や芸術は表現や鑑賞、また身体や人格にまで関わる全体的な心的過程です。心理学がそれをとらえようとするとするなら、感情にだけ注目していても始まりません。過程の中のそれぞれの概念を全体の中で位置づけることから始める必要があるでしょう。その上で、言語や論理からこぼれ落ちてしまうような文学や芸術のエッセンスを、どのような方法で浮かび上がらせることができるのでしょうか。ウズナツゼも、それからヴィゴツキーも美術や演劇を心理

学研究の対象にしていたことがあるそうです。なかなか難しいですが、心理学にとってこうしたアプローチからの文学芸術研究も大きな課題でしょう。

一つの手がかりとしてエンタテインメントをあげておきます。雰囲気や行動は知らない間に共鳴したり伝染したりします。対面した際の姿勢や仕草や発話なども、無意識のうちに互いに影響し合います。あくびも伝染します。ここで、前に述べたように構えを表すジョージア語に気分やムードという意味合いがうかがえることは指摘しておきたいところです。意識以前のモヤッとした状態だとも記しました。それから、いわゆる新生児模倣もエンタテインメントですが、感情が伝わる意識的なメカニズムだとは考えられていません。そしてこれは生後すぐから生じ、人類以外の動物でも観察されるので、遺伝的プログラムの働きだと考えることができます。

舞台を見て流すもらい涙も、演者から観衆へのエンタテインメントでしょう。音楽や踊りや仕草も同様にして無意識に訴えて、鑑賞者と同じ動きに誘うものでしょう。これらがしばしば誇張されたり様式化されるのも、エンタテインメントの効果を高めることにつながるでしょう。あるいは、劇場に一步踏み入れた途端に飲み込まれるような雰囲気、アンコールの拍手をしている間の会場の高揚、舞台と観衆全体に共有される同調なども同様に無意識の産物でしょう。こうした機能は美術や文学の世界でも同様に働いているかと思います。そして私たち相互の共感を下支えしているものだと、私は考えます。

美しさの遺伝的プログラム

さて、文楽の話になります。七世竹本住大夫が2014年に引退した後も人間国宝級を何人も失ってどうなることだろうと心配していましたが、現状はまだ大丈夫だと感じました。落語でも文楽でも還暦を過ぎて本当に味を出す人がいます。住大夫が頑張っている頃にはもう一つだと思っていた人が、今は一皮むけて素晴ら

しい語りを聞かせてくれますし、またその下の世代の若手も生き生きとして芸に磨きをかけています。2019年1月の公演では、これなら毎日でも通いたいと思うほど感動しましたし、実際に次の日も幕見で行ったものです。そして4月公演にも幕見で2回出かけました。もちろんこれには私自身の状況に大きな変化があったことも働いていたのでしょうか。

最後列の幕見席でもうっとりとさせられるような語りと三味線の響きは、美しいものは美しいの一言に尽きるような気がしました。心理学を続ける中で、美しさにはそれを感じる遺伝的プログラムがきつと働いていると考えてきました。黄金分割には疑問が投げかけられているようですが、対称性、反復などはどんな文化にでも見られます。等しい大きさが等しく見える左右の2円の対称性こそ、私の順応／残効の実験場面のモチーフです。メロディや和音も同じ効果が世界共通でしょう。そしてここでまたベビーシマです。かわいさの知覚には経験や文化の相違があまり影響しません。これらにはまた、生存、繁殖、コミュニケーションなどに関する何らかの適応的価値を見出すことができるはずで

山歩きも私のライフワークだと言えますのですが、自然の美しさも文化や時代を越えて万人が共有できるところが大きいです。景色の美しさはご来光や雲海、山の色や形、滝や池など。生物の美しさは鳥の歌声、蝶やトンボの舞、花や葉や苔の姿など。大気の美しさは木々の香り、雨や霧の気配、日光の温度など。音の美しさはせせらぎの響き、雪を踏みしめる音など。さらに岩の感触、湧き水の甘露等々。これらの美しさを私たちが互いに分かち合い語り合えるというのも、考えてみれば不思議なことです。根底に、おそらく遺伝的プログラムが分かち合われていると考えてよいのではないのでしょうか。

もちろん遺伝的プログラムだけで美しさが達成されるわけではありませんが、美しさの大きな要件であることには違いないでしょう。美しさは刺激だけで機械的に達成されることもある

でしょうが、膨大な稽古や年季を要することもありますが、鑑賞者の側の学習や経験が求められることもあります。鑑賞する際の準備状態、これはまさに構えです。そこでは遺伝的な要因と環境や経験の要因とはどういう関係になっているのでしょうか。育児の構えの場合と同様の問題が浮かび上がってきます。

美しさと遺伝的プログラムとをめぐるのはまた、ナチスとワグナーとの関係に代表されるような社会的あるいは倫理的な問題ともつながります。その裏返しは私の好きなクレーなどが退廃芸術とされた歴史です。美しさの遺伝的プログラムがあるとしたら、それは社会的文脈からどこまで独立なのか。遺伝的プログラムは私たちの生活や文明にどこまで寄与するのか、あるいは害悪を与えることがあるのか。遺伝的プログラムとマッチした文化は廃れにくいはずだというのが私の考えですが、ワグナーやクレーはずっと生き残れるのでしょうか。あるいはナチスの脅威が再び席捲する恐れはないのでしょうか。人類の生き残りを考える上で、この遺伝的要因と社会・文化的要因との関係は真面目に考えてゆく必要があります。これについては次のセクションで改めて取り上げることになります。

いわゆるフランス絵画でも今なお人気の高いゴッホ、ピカソ、マティス、シャガールなども、退廃芸術としてナチスによって押収されています。絵空事の空想ですが、フランスで文化大革命が起こったならどうなることでしょうか。世界中で人気のあるこれらの作品はフランスの強力な資本主義が生み出したブルジョア芸術として、やはり否定されるのでしょうか。またお洒落なフランス文化、私もそういうものに囲まれて快適で豊かな生活を味わいたいと夢想するような日用品、グルメ、映画、音楽、文学等々も悪の産物ゆえに禁止されるのでしょうか。私たちが生きてきた文明とはいったいどのような正体を持ち、これからどうなるのでしょうか。私たちはどのようにしたら幸せになれるのでしょうか。そして、こうした問題に心理学はどのような寄与ができるのでしょうか。

4. 再び心理学の問題

4-1 遺伝と環境

nature via nurture

美しさの場合でもそれから子育ての構えの場合でも、遺伝的プログラムによってどこまで、あるいはどのように規定されるのかが問われました。誰からも教わらないで子育てを完遂できるような動物たちは遺伝的プログラムに専ら依拠し、学習動物である人類の場合は学習に依拠する、といった話は遺伝か環境かという枠組みで議論されてきました。あるいは生得か習得か、本能か学習か、生まれか育ちか、といったふうにも表現されます。英語では“nature or nurture”というしゃれた言い回しがあります。しかし、どちらかだけに決定されると考えるのがおかしいことにも気づかれていました。

この議論に対して、“nature via nurture”という解答を示したのがリドレーです。遺伝子がタンパク質の設計図だと考えると、完成された形質は必ずその通りになります。遺伝子が決定するわけです。しかし、遺伝子は設計図ではなくて工程図であると考え、発生の過程における環境資源、時間順序やタイミング、別の遺伝子との関係などに左右されます。つまり、遺伝的にビルトインされた情報が育ちの過程における諸条件に規定されながら発現するというわけです。それが「遺伝は環境を通して」ということになります。

ここで少しだけ注釈をしておきます。私が遺伝子ではなくて遺伝的プログラムという言葉専ら使うのは、遺伝子という概念が多様で紛らわしいからです。アミノ酸の構造を決定するDNAの塩基配列という分子の実体を指す場合から、「利己的な遺伝子」のように行動を説明する上での構成概念まであります。私が遺伝的プログラムというのは、分子から一番遠い、行動の発生を説明する構成概念です。

学習の鑄型

さて、リドレーの話はタンパク質を生成する過程のエピジェネティックなメカニズムです。それに対して、行動レベルで遺伝と環境を考え

る上での同様の切り口としては、学習の鑄型をあげることができるでしょう。鳥の歌声には多くの場合に地域差や個体差があります。それは学習によって決定されるわけですが、学習は任意の形でいかなる形にもできるわけではありません。ウグイスはウグイスのように、ホトトギスはホトトギスのように歌います。ウグイスがホトトギスの歌を聞いても、ホトトギスのように歌いません。それは、何をどのように学習するかを規定している遺伝的プログラムが働いているからである、というのが学習の鑄型の考え方です。

小西正一がミヤマシトドという小鳥の歌声について実験していますが、歌声を人工的に歪めた音を聴かせても、ある範囲の歪みなら学習して歪んだ音の通りに歌います。ところが、歪んだ音を学習したミヤマシトドに歪めていない歌声を聴かせると、歪んでいない本来の歌声で歌うようになります。融通があるので一定の範囲の変異は学習するのですが、本来何を学習すべきかが遺伝的に規定されているわけです。この遺伝的プログラムが学習の鑄型です。確かに歌声は学習しないといけないのですが、学習の鑄型に準備されていればあまりにかけ離れた音に試行錯誤を繰り返すようなことは省略できます。これには敏感期があって、ミヤマシトドの歌声では性成熟する頃の学習に効果があるようです。

繁殖に関わる重要な行動は、鑄型に助けられて簡単に学習できてしまうようになっているわけです。育児の構えのところでも述べましたが、英国経験主義の白紙説のようにゼロから不規則に学習を積み上げなければならないとしたら、効率の上からも合理的とは言えないでしょう。また結果としてとんでもないものができ上ってしまうとしたら困ります。しかし実際はそうようになっています。どの個体も大体同じような時間で、同じような結果に到達します。チョムスキーが考えた、言語獲得における生成文法の役割というのも学習の鑄型と同様の発想のようです。こうなると、話は意味とか論理とかまでにも連なるとてつもなく大きく広

がってゆくのですが、

初期学習として論じられるインプリンティングにも学習の鑄型との類似性がうかがわれます。カモのヒナが生まれて最初に出会ったのが人類なら人類を親のように追いかけるのは、鑄型の融通が大きいことと通じます。一発で簡単に学習してしまうので効率的です。生まれたばかりのヒナにも簡単に学習できてしまうのです。ただし、後で本物の親に出会ってもそちらに修正することはありません。そしてこの場合は生後間もなくなりますが、学習の鑄型同様に敏感期があります。学習の遺伝的プログラムとして、共通の構造や機能を考えることができると思います。

音楽を奏でる方にも聴く方にも、美しさに鑄型を考えることが可能でしょう。美しさの鑄型に忠実なものを聴けば絶対に美しさを感じられるとすると、それは比較や弁別といった相対的な過程には当たりません。文楽の話で、美しいものは美しい、と言ったのはこういう意味です。あるいは大胆に言うと、美しさのゲシュタルトとか、ギブソン流にアフォーダンスと言っても、同じことを指すかもしれません。私は、いずれも生得的な要因に位置づけられると思いますし、そのような要因を遺伝的プログラムと呼んでいるのです。

とはいっても、学習の役割を軽んじることにはなりません。そもそも学習をしないとウグイスは歌うことができません。そして、人類の場合は鑄型に相当大きな融通が備わっていて、特に社会・文化的な文脈では多様な形を実現可能にするというのが、学習の鑄型の話の要点でもあります。学習や環境こそがそのような多様性を産みだすのです。学問や芸術の創造性というものもこんなところから芽生えてくるのでしよう。

一方で、文化も遺伝的プログラムにマッチした形になってゆく側面が考えられます。こうなると“nature via culture”ということになりますか。学習の鑄型に合った文化の形を、学習の鑄型に沿って学習することになれば、行動の形成はさらに効率的かつ適応的になると考えられ

ます。これは文化的な伝統の話にもつながります。基本的な生活の仕方を身に着けてゆくうえで学習の鑄型は極めて重要な役割を果たしているはずで、また、同じ演目が昔から繰り返される古典芸術、古典芸能などをこのような観点からとらえてみるのも面白いでしょう。

遺伝論と環境論

第二次世界大戦よりも前、米国で力を得たのが行動主義の学習心理学すなわち環境論で、ソヴィエトで力を得たのがパブロフの条件反射これまた環境論でした。戦後、冷戦時代の米国でもソヴィエトでも、やはり環境論が優勢だったようです。それぞれ、教育＝学習による体制の強化という意図も働いていたでしょう。その一方でことに戦後、遺伝論がタブー視される風潮が強かったのは確かです。いうまでもなくナチスと優生学との関係が影響してのことです。エソロジーのローレンツはノーベル賞も受賞して神格化されたような一面もありますが、ナチスに入党し優生学を支持した経歴を批判されています。

価値の問題に立ち入ると難しいのですが、環境論からは、おそらく文化相対主義のように「異なるものを平等に扱う」考え方に結びつきやすいかと思われます。個人間の相違は環境や文化の違いに起因するもので、環境や文化には優劣がないから平等だということです。これは人類の遺伝情報は個人間で共通であるという認識を前提に成り立つはずで、遺伝論からは、遺伝情報が「同じものは平等に扱う」という考え方になるでしょう。ただし、遺伝情報が「異なれば平等ではない」という論理にもなります。現在では人類は遺伝情報が個人間で共通であるという認識を前提にして、平等であるとされることになるでしょう。ならば、環境論と遺伝論の考え方は同じ前提にたつとも言えるわけです。

ところがナチスが採用した誤った優生学では、人類の遺伝情報は共通ではなく優劣もあることを前提にしました。だから人種が違えば遺伝情報が「異なるので差別する」という考え方

に至ったのです。しかしユダヤ人というのはユダヤ教を信仰とするグループを指すだけで、様々な地域に多様な人たちがいます。ユダヤ人が特有の遺伝情報を共有しているわけでもなく、遺伝的なグループを形成するとも言えません。それが人種を構成し、その人種が劣っているとするのは政治的なこじつけです。今日ではゲノムも根拠として人類の遺伝情報は共通であるとされており、生物学上は人種という概念が否定されています。

遺伝か環境かのどちらかで決定されるというのはやはり間違いです。人類の行動は学習なしに成立しませんが、根底では遺伝的プログラムが大事な役割を果たしています。学習をするためには、環境や社会・文化も欠かせないし、遺伝的プログラムも欠かせないのです。また、今日では社会主義の、資本主義の、ナチズムのイデオロギーに縛られずに、遺伝と環境との関係を語る事ができるはずでもあります。

生物学的な文脈からは、適応的価値、生き残りのメカニズムを論じることができるでしょう。適応、生き残りは遺伝的プログラムと環境との相互関係に決定されるものです。それは文明の本性と行く末を考える大きなヒントになることだと思います。遺伝的プログラムとマッチしないような文明も存続できない、またはそのように不都合な文明が人類を滅ぼしてしまうかもしれない、というような議論です。今日のように奇怪なレイシズムが頭をもたげたり核利用が継続されている状況では、なおのことそんな議論の必要性が感じられます。

4-2 文学 戦争 教養

天王寺区の文学者

私が入院した病院は大阪城の真向かいに建っていました。大阪城は東成区の実家から1キロ半ほどで、子供の頃からなじみの深いところです。その東側にはアジア太平洋戦争まで工員6万人以上が働く広大な陸軍造兵廠が広がっていて、8月15日の敗戦の前日に大規模な空爆を受けて廃墟とされました。1960年代まではその廃墟がまだまだ残っていたのを私も目に

しています。敗戦後のそこを舞台にした小説が開高健の「日本三文オペラ」と小松左京の「日本アパッチ族」です。私はこれを機会に三文オペラを読み返し、アパッチ族を初めて読んでみました。どちらの作品も廃墟に埋もれた大量の金属を盗もうと群がった人びとを描いたものです。懐かしいような、昭和の生き生きとした大阪が蘇ります。そしていずれもが戦争の災いと同時に、朝鮮半島支配や権力機構のもたらした災いも浮かび上がらせもします。

大阪城の南側に天王寺区が位置します。四天王寺に由来する地名ですが、「曾根崎心中」の発端の生國魂神社、上方落語ですと「高津の富」他の高津神社とか「天神山」の一心寺や安居神社もあります。また織田作之助が生まれ徘徊もした上町、そして私の生まれた小橋の産院のある地域です。私は高校と予備校も天王寺区の北の端と南の端だったので、いまだにこの界限は自分の庭のような感覚です。

織田作之助それから開高健とも同じく、天王寺区出身の作家に小田実がいます。「ベトナムに平和を！市民連合（ベ平連）」の運動の中心メンバーでした。パートナーが在日コリアンでもあり、在日コリアンの話題が頻繁に出てきます。天王寺区は伝統的な在日コリアンの街である猪飼野とも隣接しているので、このような部分でも私にとって小田実が近く感じられます。私は若い頃、つまりベトナム戦争がまだ終わっていないとか終わったとかいう頃にいくつか評論を読んで共感したものです。そこで今度は「何でも見てやろう」という20歳代の留学および放浪記から始めて、いくつかの小説や評論を読みました。

小田実は大学生の時にギリシアの古典を研究していただけあって、やたらと長編を書きましたが、そのエネルギーには驚嘆するばかりです。そのエネルギーは文学に止まらず、行動する人として「ベ平連」以後も「九条の会」の呼びかけ人であったり、後には阪神淡路大震災で被災した経験から被災者支援の市民立法の活動も行っています。読むだけ、書くだけ、話すだけといった知識人たちとははっきりと異なっ

て、実践的な社会活動を続けているがゆえに訴えてくるものが作品の随所に現れます。そして、それがいかに大きいかを改めて思い知りました。

これは心理学者にとっても大事なことでしょう。私が大学生の頃、つまりベトナム戦争が終わった直後ですが、卒業論文に打ち込む一方で臨床や幼児教育や障害児療育に関わりたいたった動機を膨らませて、それなりに参加もしました。その背後には、このような時代の力が働いていたのかもしれないと、今になってそんな気がします。しかし、こうした経験は他人のためというよりも、自分のためにこそまだ生きているように感じます。また、大学の教師としてこれまで何をしてこれたか、振り返れば悩ましいところです。学生に向かって語ってはきたけれど、相手よりもむしろ自分の考えを育ててきたような気もするのです。

戦争を知っている世代

ところでこれまでで名前を挙げたうち、小田実、開高健、小松左京の間には「ベ平連」という共通項があります。また小田実と加藤周一の間には「九条の会」という共通項があります。いずれも戦争を忌避する立場に立つ運動の組織です。「九条の会」では大江健三郎、鶴見俊輔にも今般接しましたし、井上ひさしは「九条の会」なので敢えて読んでみました。彼らには共通してアジア太平洋戦争と戦後の窮状の体験があります。しかし大江健三郎以外は既に他界しています。

彼らの世代はおよそ私の親の世代でもあります。彼らが作品を発表した時代はいわば私が育った時代であり、今読むと懐かしい世界が広がっています。そして言葉が不思議なほどにスッと入ってきます。今、私には彼らの存在が大きく重かったことが痛感されます。まずは実際に戦争でひどい目に遭ったという体験そのものを持つこと。多くの不条理な死を目の当たりにしたり、恐怖、不安、悲哀、喪失、飢餓などを自ら体験したことの重さです。しかし同様の体験を持っていても思考を停止したり口を閉ざ

した人たちもいました。それに対して、なぜ戦争が起きたのかということから始めて、どうすれば戦争を防ぐことができるかということまで考えて行動したのが「ベ平連」や「九条の会」の実践的な運動に携わった人たちでしょう。反知性主義という言葉がありますが、戦争を知っている世代の知性が残すものこそこれからは貴重だと思います。

世代が代わって彼らの発言や行動が消えてゆく影響は計りしれないと思います。政治家の世界でも、戦争を知っている世代と戦争を知らない世代とでは大きな違いがあるように見えます。それは、戦争を知っている世代の時代は「戦後」だったのに対して、今は戦争を知らない世代の時代になって「戦前」が始まっている、という不気味な話としても語られるところです。戦争体験のある平野貞夫という元保守系政治家がいますが、戦争を知らない安倍政権の勢力は平和な戦後の体制を転覆しにかかっていると訴えています。

しかし考えてみれば、戦争経験者の話というのは、戦争で死ななかつた人の話です。もちろん死なないまでも、前述のように自ら体験したことは非常に重いことです。しかし、不条理に死んだすなわち殺された当人の苦痛、恐怖、無念、疑念、悲哀などはまさに死人に口なしです。一番強く訴えて、一番重く受け止められるべきはずの声というのが永遠に伝わらないのです。何という矛盾であり皮肉であるかと私は悔しく思います。それゆえか、昨今は戦争、災害、犯罪、事故などでもたらされる不条理な死、小田実の言う難死、というものに敏感に注意が向くようになってきました。

戦争を知らない私たち

では戦争を知らない私たちはどうすればよいのでしょうか。まず、戦争の災禍を伝え続けること。これは教育の仕事です。次に、なぜ戦争が起きるのか、どうすれば戦争を防ぐことができるのかを考えること。これは研究の仕事です。さらには戦争を起す動きに対抗することです。大学だけの仕事ではありませんが、いず

れについても大学の役割が大変大きいのです。しかし大学の中の状況や大学を取り巻く状況を見れば、大いに問題あります。個人のレベルでも組織のレベルでも、自分の考えを語るべき時に黙ってはいないでしょうか。本来は独立、独自、自律的であるはずなのに、強い力に無批判であったり忸度などしていないでしょうか。大学にいる人びとは、まずこういう点で自らと自らを取り巻く状況を見つめ直すところから始めるべきでしょう。これは意識が高いとか低いとか言う問題でもあります。意識以前の構えとか人格に関わってくるはずで、私がこんな文章を書いているのにも、実はそのような自戒が込められているのですが。

そして問うべきは研究者一般の、文明すなわち政治、経済、環境、文化、歴史などへの関心そして教養でしょう。資格や応用など実用向きの事柄に目を奪われて、文明のあり方といった大きな文脈から研究や教育の目的を考える余裕がなくなっているのではないでしょうか。社会のため、あるいは人類とか環境のためといった意義を考えるためには、文明の歴史、現実、そして未来を総合的にとらえる教養が必要です。科学者が開発した核兵器の厄災がやがてラッセル＝アインシュタイン宣言に帰結し、それでも原発の厄災は防げていないという経緯がそれを教えてくれます。教養については、この後で少々論じます。

なぜ戦争が起きるのか、どうすれば戦争を防ぐことができるのかを考えることは心理学にとっても重大な課題です。例えば、戦争を引き起こして指導してゆく者と、それに反対したり賛成ないしは屈従する者、つまり権力による支配と被支配の心理学です。それこそ支配する側の構えとされる側の構えの問題であり、双方にとっての適応の食い違いの問題になります。ことに民主主義の社会では支配する者を支配される側が選ぶことになるので、私たちのように支配される側の問題は大きく、また支配されることになる学生たちの教育も重要です。

しかし難しいのは研究方法です。目的や仮説に対して的確な方法を使えるかどうかとい

う、研究者の力量の問題です。最近、ジンバルドーの有名なスタンフォード監獄実験に不正とも言える方法的欠陥があったことが明らかにされました。また、今日の研究倫理審査にかけたなら、ミルグラムのアイヒマン実験と共に承認されないでしょう。いずれも権力による支配と被支配の心理学的メカニズムという、戦争やホロコーストと密接に関係した問題を扱ったのですが、よほどの工夫がない限り、心理学がナイーヴな発想や小手先の技術のままで平和、自由、人権といった大きな問題に立ち向かうのは本当に難しいことだろうと思われまます。ジンバルドーやミルグラムの戦争を知っている世代から、戦争を知らない私たちやさらに後の世代に譲られた大きな課題です。

さらには、研究者同士の対話や連帯という課題もあります。研究者の共同体とその外の世界との対話や連帯も課題になります。その先は、戦争を起こす動きへの対抗につながることもなります。これらは政治的な問題を抱え込むものでもあり、私の苦手を感じるころでもあります。ただ、一つだけ述べるとすると、こうした対話や連帯が楽しいとか、自分を豊かにしてくれるとか、互いの相違を受け入れるとか、協働の中から新しいものが生まれてくるとか、だから自発的に行うとかいうことが大事で、義務や強制で一律に行うものであってはならないでしょう。

教養と目的

研究や教育には、細分化された専門領域を深く追究すると同時に、広範な領域への視点、広範な領域を総合する教養の働きが必要です。だんだんと崩れてきましたが、近代の大学は専門課程と教養課程とを二本柱にするものです。専門課程は細分化された研究領域や科目から成ります。教養課程は専門的な研究領域や科目をベースとしながらも、細分化された領域や科目を総合する役割を担うものです。従って教養課程では専門領域以外の科目を広く履修することになります。しかし近代の大学では、その総合をどのように進めたらよいか道筋が読みづら

く、徐々に教養課程を軽く扱うようになってきたという歴史があります。

一方では専門的な研究が進んで知識や知見が増すと共に、学部の特設課程だけでは足りなくて大学院へ先送りしようという流れから、大学院を充実させる施策が進められもしました。始めの方で人間科学について述べた折に「今の大学の学部教育の目的は教養教育だ」と記したのは、こうした状況に基づきます。教養課程が専門的な研究領域や科目をベースとしながら細分化された領域や科目を総合する役割を担うのと同様に、学部全体が専門課程も含めて教養課程の役割を担うことができるという意味です。逆に、教養課程を縮小して学部を専門課程だけにしてしまうと、それはもう大学ではなくて専門学校あるいは職業学校と同じになるでしょう。学問をする場ではなくなってしまう。施策する側ではそれを目指しているのかもしれませんが。

個人にも教養が必要ですが、学問の世界にも教養が必要なのです。構えの心理学のところでは、「教養の機能が学問や教育全体の分節化と結びついている」と述べました。分節化は部分と全体を、分化してかつ総合的にとらえる働きで、私たちの認識の基本です。教養の機能は、個人の中で総合をして認識を分節化すると共に、学問の中で総合をして学問の世界全体を分節化することでしょう。分節化の入れ子構造です。それによって広範な領域にまたがる問題間のつながりや、総合された全体から初めて見出される新たな問題が洞察されます。ゲシュタルト心理学で言われたように、全体が形成されるとそれぞれの部分には見られなかったものが発生するのです。分節化は認識一般の問題として心理学の課題になると同時に、研究や教育のあり方を議論する上でも肝要な問題になるでしょう。

一人一人それぞれが異なる全体を成す個人の間では、専門性が同じであってもそれぞれの教養は異なります。その多様性が新たな発見、発明、創造を産みだすでしょう。研究や学習の血であり肉であるのです。大学の英語 univer-

sity も「統一された」とか「全体」というラテン語の由来を持つそうです。ゆえにそれぞれが全体を成す大学はそれぞれが多様で学風が異なり、その目的も異なるのが本来のはずです。ところが現今の大学を見れば、世界中どこでも同じようなカリキュラムや研究支援あるいは資格を掲げて画一化するように誘導されています。これでは目的は、画一化されるどころか無に帰してしまうと思われま。

研究や教育の出発点は目的です。それは広範な領域が視野に入っているほど妥当性や意義を増すでしょう。総合され分節化されることで、領域にまたがる問題間のつながりや、総合された全体から初めて見出される新たな問題を目的に包含できるからです。大きな全体をとらえることで妥当で意義ある目的が見えます。あるいは逆に目的が妥当で意義あれば大きな全体が見えてくるでしょう。タコツボないしはサイロを掘ってはいはそれが見えません。このように、目的の妥当性や意義は教養に支えられていると言えるでしょう。

加藤周一は、文学は人生や社会の目的を決めると述べました。これは文学が人間の価値観に与える影響の大きさを訴えるものでしょう。まず、文学で取り上げられる広範で多様なテーマの中に、今その人間に強く深く訴えるものが必ず存在するはず。次に、論理や合理性がどれほど整っていても、学問の説得力は文学的表現の説得力には及ばないということでしょう。文学は言語を用いていながらも、意識や言語にならない構えとか人格とかいう深奥にまで訴えるからです。また違う角度からは、人生や社会には文学から伝わるような明確な目的が必要であることも訴えています。彼が言うには、自分の目的を持って、自分で考えるのです。ただその時その時の多数に同調して、というのではだめなのです。これは近代社会の文脈における教養の役割も言い当てていると思います。文学が心理学を研究する目的を決めるということもあるでしょう。

求められるのは妥当で意義あり明確な目的です。それは心理学に限らない研究、また教育、

思想、芸術、文化の目的に連なります。そして加藤周一が文学で決められると言った、人生や社会の目的と重なります。それは例えば、仕事や生活をする姿勢やそれらを運ぶ方法も問われます。人や文化との接し方も問われます。戦争や社会の体制とどう向かい合うかも問われます。さらには、環境や文明の行く末を考えることにもつながります。それを裏打ちするのは広くて深い見識すなわち教養ということになるでしょう。そしてこうした問いを追うことは、再び「人間とは何か、生きるとはどういうことか」という問いに行きつくことになります。

4-3 それでも心理学で……

研究の寄る辺

結局、心理学を離れてなどと言いながら、どうにも離れられないようです。うまく手玉に取られてしまったような気分です。ほんの少し大きな海を覗いてみたところ、どこを向いても心理学と関わる問題があり、あるいは共通する方法や問題点が見かけられました。しかし、私なりに整合的に受け止めて考える道筋も見えてくることも分かってきました。それらは常に意識／無意識、遺伝／環境、発生、適応といった論点を巡るものだと言えます。もちろん、もっと多様な考え方のほんの一部に過ぎないのですが、

これには、学生の時から一貫して心理学の中で構えという概念と向かい合い続けて、これを軸足にして意識／無意識とは何か、行動とは何か、人間とは何か、それらを研究するにはどうしたらよいか、といった問いを繰り返してきたことが役立つと思います。川口先生からは、マルクス主義でも自然主義でも何でもよいから主義を持って、と言われました。当時はまだ東西冷戦が終わっていませんでしたが、イデオロギーというもののはっきりしているほどそれを差し引いたところにどれほど真実が含まれているかが分かりやすいものだ、とも聞きました。

広い範囲に普遍的な答えを探すには、より基本的、根本的な問いかけを続けることが必要

で、その際に寄る辺とできる軸を保っておくことが善策なのです。しかし、その寄る辺に完全を求める必要はありません。むしろ、問いかけを繰り返すうちにその寄る辺を客観的に見ることができるようになるでしょう。また、一定のバイアスの分を差し引きして補正するとか、寄る辺自体を修正するとかも可能になるでしょう。パラダイムとかディシプリンとかいうのはそういうことでしょう。この考え方を聞いて「これ、要するに弁証法へのいざないですよ」と評してくれた友人もいます。

科学としての心理学

これまで心理学に不足ばかり言ってきたみたいですが、心理学には優れた特性もあります。それは、心という目に見えないものについて、客観的、実証的に科学しようという、無理筋とも言える目標を追い続けてきたことです。無理かもしれないというギリギリのところ、科学とは何かあるいは認識とは何かといった問題を検討することができると思うのです。ここで心理学を客体化してみるわけです。すると科学というものを検証する臨界的な試験場の役割を、心理学は果たすることができるのではないのでしょうか。本稿で取り上げたような意識主義批判は、その際の中心的な議論の一つになるでしょう。

心理学ではしばしば、客観性や実証性のために目に見えない意識を排除して、目に見える行動に着目し測定するという解決法をとります。しかし小手先だけで問題が解決するわけではありません。行動は目に見えても、考察すべきはそれぞれの行動の意味であり、それらの間の文法とも言える関係です。それらは直接見ることはできませんが、そこから心のメカニズムが浮かび上がってくるのです。こうした意味や関係を洞察する力がそれぞれの研究者の力量なのです。このような事情は科学一般とも共通するものでしょう。

学生の時、心理学の研究は紙と鉛筆だけできれいな結果が出せるようなものこそが優れている、と説かれたのは前田嘉明先生でした。その

通りだと思います。高価な最先端機器やソフトウェアを使うことでやっと有意差が見つけたという研究にも意義がありますが、単純な方法によって単純明快かつ普遍的な結論を示す方が説得力をもつでしょう。科学の単純性です。仮定がより少ないほどより優れた理論になるというオッカムの剃刀と同様に、より単純な方法で実証できるほどより優れた研究になるというわけです。それが研究者の力量にかかってくるのです。

科学を装うことで表面を綺麗に取り繕っても、意義のない研究というものもあります。問題と解答には意義が認められるけれど、方法に説得力が欠ける研究というものもあります。他方で、標本が1個のケーススタディで科学的とは言えないけれど、大きな意義をもつというのは臨床の知です。標本が1個でも新発見ということもあります。さらにはノンフィクション文学が大事なメッセージを伝えることもあるし、それこそフィクションが強いインパクトを与えることもあります。何を狙ってどういう方法で説明するか、表現するかは、本来多様な選択肢から自由に選べるのです。ただその選び方には明確な目的が必要です。

役に立つ研究

竹本住大夫の引退興行の時、楽屋を訪れて話を交わすことができました。住大夫が近畿大学の前身である大阪専門学校に在籍していたということもあって縁があり、私の研究室に電話をもらったこともあります。そういうわけで私が文楽に通い始めた当初もこの人間国宝が目当てでしたが、住大夫の芸によってどんどんと惹き入れられていったものです。大変魅力的な人柄で、脳梗塞のリハビリをしながら舞台上に復帰した時もまだ不自由な手を握らせてくれました。ただし芸には厳しくて、後輩に鬼のような稽古をつけたと聞きます。住大夫も私の親の世代にあたり、20歳で中国大陸へ兵隊に行っています。

89歳からの言葉は「おたくの仕事も私の仕事と同じで、生涯勉強でんなあ」というもので

した。学問の道も芸の道も、どこまで追っても果てしないものです。先代住大夫の息子であり、「根が浄瑠璃好きやねん」と言う人でした。しかし住大夫が立派にまた厳しくその道を歩み通したのは、浄瑠璃という自分の芸を磨き続けるだけではなく、人形や三味線と一体になって文楽を洗練し盛り立てて、観客を喜ばせ社会から必要とされるものにするという公共的な目的があったからだと思います。文楽を必要とするような社会は素敵な社会だと、私は思います。従軍経験のある住大夫は、そんな社会にすることも目的としていたのではないのでしょうか。

学問にもこういう意味での公共的な目的が必要だと思います。これは私自身の反省になりますが、「人間とは何か、生きるとはどういうことか」という問いから出発して、どうしてもそれを個人的な目的に終わらせてしまいがちになります。そこで木に竹を接いだように、「役に立つ」という触れ込みで計画書を書いたりします。しかし金儲けになるような別の事業のために役立つことだけが「役に立つ」ではありません。文楽の場合と同様に、その学問それ自体を社会が必要とするような役立ち方こそを考えたいものです。

海辺の少年

学生たちにも、心理学はどうにもいかがわしい学問だし、心理学だけでは十分ではないと言ってきました。でも私にとってはやっぱり心理学なのでしょう。私の手には負えませんが、心理学にはそれ自体に対する課題も、社会や文化そして文明に対する課題も、重要なものがまだまだあります。もっとも、「人間とは何か、生きるとはどういうことか」というのはあくまでも開かれた問いです。心理学であれ他の方法であれ、提示できるのはやはりいくつもの異なる答えのうちの一つにとどまります。ただ、文学と同様に、人生や社会の目的を決めるような心理学の研究に、何人かの誰かが出会える可能性はあると思いたいところです。

差し当たり、心理学を続けてきてよかった

ということにしておきましょう。しかし、依然として私は海辺の少年のままです。その少年が大きな風呂敷を広げて、いくつかの小石や貝殻をパラパラとぶちまけたというのが本稿です。

もっと立派なコレクションを誇る巨人もたくさんいることなので恥ずかしくもあるのですが、本人は結構これで満足しているようです。